

エチオピア映画祭をおえて

松村圭一郎

ことのはじまり

ICES事務局の游さんから、はじめてエチオピア映画祭の話があったのは1997年の6月ごろのことだった。もともと映画を観ることが好きだった私は、「学生が中心になって」という言葉に強くひかれて、飛びついた。せっかく国際エチオピア学会の手伝いをするなら、人に使われるよりは自分たちでつくりあげていくほうがいい、そんな考えがあった。いま思うと、フィルムや映写機にさわったこともないのに、少々甘くみすぎてたかもしれない。実際、映画祭を運営していくなかでさまざまなトラブルに見舞われてしまう。

もともとこの映画祭の企画は、今回の招待監督の一人であるイエマネ・デミッシー(Yemane I. Demissie)さんの方からもちだされたものだった。最初に監督から手紙による打診があったのは、96年11月のことで、それ以降は游さんが監督とe-mailで連絡をとっていた。イエマネさんの意欲は相当なものだったらしく、こちらが返事をしなくても、何度も具体的な企画を提案してきたそう。游さん曰く「監督の粘り勝ち」だとか。そういうイエマネさんの熱意の甲斐もあって、97年の7月2日、日本ナイル・エチオピア学会の運営幹事会において、「広く学生や一般の方にエチオピアへの認識を深めてもらう」という趣旨でエチオピア映画祭の実施が正式に提起される。そして7月からは事務局の多治見さんが游さんにかわって、監督との連絡や航空券の手配などの手続きにとりかかった。

ふたりのエチオピア人監督

当初、イエマネさんの方からは他にも4人ほどのエチオピア人監督のリストが送られてきていた。9月頃には、その中から女性監督のセーレム・メクリア(Saleme

Mekuria)さんを今回の学会に招待することがきまった。ここで簡単に二人のエチオピア人映画監督の紹介をしよう。

イエマネ・デミッシーさんは、UCLAで映画製作を学び、M.F.A (Master of Fine Arts)を取得。1987年の初監督作品“KENTU”では、アメリカの大学を卒業したエチオピアの若者が祖国に帰るべきか苦悩する姿を描いた。1989年には、アメリカにはじめてやってきたエチオピア人の経験を描いたコメディ、“BAHER MADONURO”を発表。その後、二人のエチオピア人監督の作品にかかわるかたわら、南カリフォルニアで3作目の撮影をつづけ、1996年には今回の映画祭で上映した“GIR-GIR”を完成させる。この“GIR-GIR”は5年もの歳月をかけてつくられた、イエマネさんにとって最初の長編映画で、各国の映画祭に招待されていくつもの賞を受賞している。彼はさわやかな笑顔が印象的な人で、そのこやかさの奥には知性を感じさせた。私たちは、とりあえず「ヤマネ(山根?)さん」とよんでいた。

セーレム・メクリアさんは、独立の監督として映画を製作する一方で、マサチューセッツ州のウェルズリー大学で映像芸術の教鞭をとっている。また、長年にわたって公営テレビのドキュメンタリー製作にたずさわり、アフリカの女性と開発の問題に焦点をあてた作品づくりに取り組んできた。彼女が監督した代表的な映画には、黒人コミュニティの生活を描写した“OUR PLACE IN THE SUN”(1988)、ハーレム出身の作家ドロシー・ウェストの肖像“AS I REMEMBER IT”(1991)がある。このふたつの映画は、いずれもエミー賞にノミネートされている。そして、今回上映したのが“SIDET:FORCED EXILE”(1991)と“YE WONTZ MAIBEL:DELUGE”



イエマネ・デミッシェ監督

(1997)の2編。ともにドキュメンタリー映画で、それぞれ難民と学生運動という政治的なテーマを扱っている。ドレッド・ヘアをなびかせて颯爽と歩く姿は、まったく年を感じさせない。彼女の数々の厳しい注文には悩まされたが、それは彼女の映画づくりに対する真剣な姿勢のあらわれでもあった。

11月の半ばに私たちがまずとりかかったのは、ポスターづくりである。ポスターのイメージは、二人の監督から送られてきていた写真からおおよそできていたのだが、実際につくってみるとなかなか思いどおりにはならない。パソコンの画面に向かいながら、数ミリの世界でレイアウトの試行錯誤をかさね、一晩でなんとか形にした。一週間ほどで印刷ができあがり、大学構内だけでなく、映画館やレンタルビデオ店、喫茶店やアフリカ料理屋にまで配り歩いた。英語字幕しかないため、本当に観にくる人があるのか心配であったが、とにかく12月12日の本場を待つしかなかった。

ちょうどそのポスターづくりにかかろうとしていたとき、あらたにもう一人の民族誌映画の監督を招待するという話がもちあがっていた。エチオピア西南部の民族、ハマルの研究で知られる、ドイツの文化人類学者、イヴォ・ストレッカーさんである。イヴォさんは福井勝義先生の古くからの友人であり、言語学者であるジーン・ライダルさ



セーレム・メクリア監督

んや、映画作家のジョアンナ・ヘッドさんとともに、ハマルについての民族誌映画を数本製作していた。学会中の12月14日に、“THE FATHER OF THE GOATS”(Ivo)、“THE WOMEN WHO SMILE”(Jean/Joanna)、“TWO GIRLS GO HUNTING”(Jean/Joanna)、“WORRY AND HOPE IN THE FACE OF DROUGHT”(Ivo)、“THE SONG OF THE HAMAR HERDSMAN”(Ivo/Jean)の5作品を上映することになった。

トラブル続きの初上映

12月12日。エチオピア人の2人の監督の作品を京大会館で上映する日である。夜明けごろにやっとパンフレットが完成する。当日は、まさに「トラブルつづき」だった。まず、朝の監督とのミーティングのなかで、「京大会館は遠くて学会参加者が行けないのではないか」とクレームがついた。こちら側としては、一般の方を対象として考えていたので、学会参加者の移動については何の準備もしていなかった。結局、スタッフの学生一人に市営バスをつかって案内してもらうことにした。

ミーティングを終えて京大会館にもどると、あらたに重大な問題がおこっていた。ヤマネさんのフィルムが、映写機にセットするためのリールに巻かれていなかったのである。このままでは上映できない。急遽、予備のリールにフィルムを巻きつける作業にとりかかる。幸いヤマネさんの映画はプログラムの最後であったが、2時間分4本の



【写真】 エチオピア映画祭の観客。97.12.12. 京大会館。

リールを手作業で巻きつけるなど不可能に近かった。しかも、一度リールに巻きつけたとしても、再度別のリールに巻き直さなければ、頭から上映ができない。すでに開会の時間はすぎ、会場に入った50人ほどの人たちのあいだには、いつになったら映画祭が始まるのかといったそわそわとした雰囲気があった。

とりあえず、プログラムどおり東京大学の石原美奈子さんに映画の背景についての解説をはじめてもらった。その間スタッフは控室でヤマネさんのフィルムと格闘をつづける。石原さんには少し長めに時間をひきのばしてもらおうが、もう上映予定を15分も過ぎている。メクリアさんの“SIDET”の上映の準備にとりかからなければならない。きちんとリハーサルをする時間もなかったが、なんとか映像はスクリーンに映った。しかし、そこでメクリアさんが“Stop it!”と声をあげた。

「画質が悪い。こんなのは上映できない」。会場では、やっとはじまったばかりの映画がすぐにまた消えたことで、ざわめきが起こっていた。「このまま上映するなら、わたしは見ない」。メクリアさんは会場を出て行ってしまった。つぎの上映準備もできていないうえ、この映画を上映しなければヤマネさんのフィルムも間に合わない。われわれとしては、上映をつづけるしかなかっ

た。

この後は、メクリアさんへの謝罪、ヤマネさんのフィルムを巻くための映写機と新たなリールの追加注文、つぎのメクリアさんの上映準備、と映画をみている暇などなかった。いま思えば、すべての映画を上映できたこと自体、奇跡的だった。わたしは、不手際の連続で、正直いって打ちひしがれていた。映画を観終わった観客の一人が、「運営がよかった」と声をかけてくれたというのを聞いて、なにか複雑な気持ちになった。

学会会場での上映会

12月14日。朝10時から夜8時まで、ホテルサンフラワー京都の「平安の間」で映画を上映することになっている。当初は、イヴォさんの映画だけを上映するはずだった。ところが、学会参加者にも見てもらいたいという監督側からの強い要望があり、前回メクリアさんの“SIDET”がうまく映らなかったこともあって、二人のエチオピア人監督の



【写真】 民族誌映画の解説をするイヴォ・ストレッカー教授。97.12.14. ホテルサンフラワー。

三つの作品もあわせて上映することになった。

2度目での失敗は許されない。14日の前の晩も、徹夜で機材のセッティングとリハーサルにかかった。そんな準備に追われていた、午前4時。事件はおこった。映写機の微妙な位置調整をおこなっていたところ、土台にしていた長机の脚が折れ、2台の映写機が床にたたきつけられてしまったのだ。映写機のアームがとれ、本体も破損している。しばらくは、なんとか機材を直そうとあがいてみたものの、どうにもならない。冷静な自分を取りもどすまで1時間はかかった。もう映画祭をこのまま続行する自信はなかった。

夜が明けてから、重田先生に「ここでやめるわけにはいかないだろう」という言葉をいただき、新たな映写機の手配にかかる。時間はない。映写機が到着するまでの間にできるだけのことをおわたせる。張りつめた時が流れる。

朝10時。ほぼ時間どおりの開会。観客も20人ほど入る。3作品目ぐらいまできて、やっと映画を観る余裕がでてくる。会場に来たのはほとんどが学会参加者だった。セッションのあいまをみながら、予想を上回る数の人がきてくれた。12日のときとおなじく、上映後は1作品ごとに監督との質疑応答がおこなわれた。なかには非常に議論が白熱することもある。時間を気にしながらの上映がつづく。

8時半すぎに終了。最後に上映された“SIDET”もきれいに映る。すべて上映し終わった後で、2人のエチオピア人監督から

も笑顔で「パーフェクト」という言葉をもらう。学会参加者からは「映画はもうやらないのか」と何度も声をかけられた。「僕もやりたいんですが」。最後はそう思えるようになっていた。

エチオピア映画祭をおこなうにあたっては、多くの方にお世話になった。石原美奈子さんには、会場で解説をしていただいただけでなく、パンフレットに映画の背景となるエチオピアの社会情勢の説明を書いていただいた。おなじく、都立大の増田研さんにも、ハマルやイヴォさんの映画についての解説を書いていただいた。学会事務局の遊さんと多治見さんには、監督との連絡やチケットの手配など、「学生が主体となって」といながらも、結局、複雑な手続きはまかせっきりであった。そして、たび重なるトラブルをともに乗り越えていき、「映像技師」になる夢をかなえた望月幸治くんや、ポスターとパンフレットづくりに「エンジニア」ぶりを発揮してくれた左古将規くんをはじめ、京都大学フィールドワーク研究会のメンバーの協力がなければ、この映画祭は開催できなかった。この場をかりて、みなさんにお礼を言いたい。

(まつむら けいいちろう
京都大学総合人間学部)

追記:エチオピアからのニュースによれば、セーレム・メクリア監督の“YE WONZ MAIBAL”は、1998年7月にアジスアベバで初上映されたという。